

コメント

民具学としての物質文化研究

Writing History from Objects

小島 摩文

KOJIMA Mabumi

1. はじめに

本論集は「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」というタイトルのもと「日本と中国・韓国の民具を民俗学・考古学・文化人類学・移民研究といった視点から比較し、共時的に両者の共通性と差異性を明らかにしようとするものであり、対象は「生と関連した民具」と「死と関連した民具」としている。ここで、「生と関連した民具」とは「日常生活と関連するモノ」であり、「死と関連した民具」とは「葬送墓制や慰霊などと関連するモノ」だという。

筆者には、民具研究者としての視点からのコメントが求められている。民具研究とは何だったのかをふりかえり今後の物質文化研究の方向性をみいだすことで、それぞれの論文へのコメントにかえたい。

2. 民具学と民具研究

宮本常一に『民具学の提唱』という本がある。この中で宮本は「民俗学から民具学を引きはなす理由」という項目を立て、「物をしらべるには物をしらべるための方法がなければならない」といい、口頭伝承や習俗などの研究方法と物質文化との研究方法の違い、さらには考古学と民具学の違いをあげ、民具学の独立性を述べている。

一つの研究領域が「学」になるかならないかは、さまざまな場所でさまざまな議論がおこなわれている。民具学／民具研究でも、それが学となり得るかどうか議論されてきた。そもそも「引きはな」される母体の民俗学自体が「学」として成り立っているのかどうか盛んに議論されてきたところなので（牧田 1969 : p. 181）、民具学がそうした議論にさらされてきたのは当然と言えば当然である。

しかし、ここでは「学」として成り立つかどうかは、あえて問わない。渋谷敬三が「民具」という言葉を術語として創出して以来、数多くの調査・研究がおこなわれ、昭和 50 年（1975）には日本民具学会が設立され、機関誌が発行されてきた。またアチック・ミュージアム、日本常民文化研究所では「アチックマンスリー」、「民具マンスリー」を発刊し、それぞれ巻号を重ねてきた。こうした蓄積を今「学」といえるかどうか検証している紙幅がないので、とりあえず本論では「民具学・民具研究」を総称して「民具研究」としておく。重ねて述べておくが、筆者は「民具学」を否定しているわけではない。「民具研究」は便宜上の名前である。

次項以降で、民具の定義について見ていくが、民具学／民具研究が何を対象としているかは、隣接する学問領域と比較することも一つの方法であろう。考古学、生活史学、風俗史学（有職故実）、民芸論、技術史、産業史などがあつかうモノと民具学があつかうモノがどこが同じでどこが違うのか、同じモノをあつかうにしてもどのように方法が違うかなどを明らかにすることで、民具

学／民具研究の独自性が何かが見えてくるはずである。今回は紙幅の都合で割愛するがいずれ論じたい。

3. 「民具」の出発点

民具研究では、これまで民具の定義をめぐる、さまざまな議論がおこなわれてきた。『アチックマンスリー』でもたびたび論じられ（小川 1991、2002）、日本民具学会設立当初の『民具マンスリー』誌上でもさまざまな議論がおこなわれた。小島環礼は「民具学会にのぞむこと」で「民具研究とは何かという問から出発しなければならないであろう。民具講座で議論が集中したのも、結局は、この点であったと思う」と述べている（小島環礼 1975：p. 17）。

日本民具学会の設立の発議がされた 1974 年の第 1 回民具研究講座（日本常民文化研究所主催）の特集号となった『民具マンスリー』7 巻 8,9 号、次号の山口賢俊「民具の定義などについて」、8,9 号、10 号、11 号と掲載された「民具研究講座に参加して」、日本民具学会が設立した 1975 年の『民具マンスリー』8 巻 10,11 号「特集 民具講座・民具学会」、さらに第 3 回民具研究講座の特集号である『民具マンスリー』9 巻 8,9 号などで常に話題になっているのが「民具とは何か」であり、「民具研究／民具学とはなにか」ということであった。

先にも述べたとおり、「民具」という術語は渋沢敬三の造語である。宮本常一はこの辺の事情を次のように記している。

民具ということばは渋沢敬三先生がつくった。しかもきわめて新しい。昭和八年九月に書いた「アチックの成長」ではまだ民具ということばは使っていない。民俗品とよんで、その写真集『民俗図彙』を作る計画をたてている。しかし昭和一〇年七月に第一号を出した『アチックマンスリー』には民具ということばを用いているから、この二年ほどの間に民具ということばは定着したと思う。（宮本常一 1987, p. 44）

それ以前は民具のことを「土俗品」と呼んでいたが、「土俗」ということばを嫌ってやがて「民俗品」とよぶようになり、最終的に「民具」という呼称になったのだという。

『民具研究ハンドブック』では「民具の概念」の項で、「（民具の）定義を渋沢敬三は、（中略）『我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具』とした」と紹介している（岩井 1985：p. 2）。ここに見られるように、渋沢が、民具ということばを作り出した当初からこのような定義をしていたように取られがちである。しかし、近藤雅樹が指摘するように「渋沢が当初想定していた『民具』の範囲はきわめて限定的なもの」であったが、資料の増加にともない「民具」の定義がゆらぎ、「（アチック・ミュージアムの）同人たちとの議論を重ねるにしたがい、自製を原則とする「未開社会」の生活道具、つまり「土俗品」の範囲にとどめておけなくなり、渋沢の民具観が崩れていった」のが実態であった（近藤 2002a：p. 16）。

渋沢敬三以前からおこなわれていた物質文化研究である土俗学に習って土俗品を民俗品とよび、それをやがて民具とよぶようになったという出自を持つ「民具」という術語は、自給自足的な生活をしている人々の物質文化を研究するための分析概念として立ち現れたといってもいいだろう。しかし、それを自給自足的な生活をしているわけではない日本の物質文化研究に適用すれば、必然的に齟齬がでてくる。

近藤雅樹は「『我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具』という一

節は、渋沢の民具観を克服したあとにアチック・ミュージアムが公表したもの」だとして、必ずしも渋沢自身が当初描いていた民具の概念ではないことを指摘している。

しかし近藤は、この「渋沢の民具観を克服したあと」の「民具」の概念すらも「古典的な民具観」だという。そして、「この一節は、民俗学の入門書に必ずといっていいほど引用された。そのために民具の定義と思われて研究者を束縛することになった」としている（近藤 2002a：p. 17）。

そうした側面もあったと思うが、しかし、実際には、民具の概念は揺らぎ続けてきたのではないだろうか。入門書の一つであろう『民具研究ハンドブック』が民具の定義として、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」をあげているのを紹介したが、岩井はそのあと、この定義を厳密に適用すれば「自製民具」のみが「民具」だということになるが、「しかし、民具は自給製品ばかりでなく、専門職人の製品也多」いとして、素材や手作りかどうかには関わりなく、「ブラックボックスのないものが民具であり」、「人間の生活上もっとも単純な構造をもった道具」が民具であると提案している（岩井 1985：pp. 3-4）。

小林茂は自身の仕事の集大成としてまとめた『内水面漁労の民具学』の中で民具の定義についてふれている。472 ページになる三部構成のうち、第三部を「民具とは何か」にあて、渋沢敬三、岡正雄、岩井宏實、宮本馨太郎、河岡武春、宮本常一、中村たかを、神野善治のそれぞれの民具の定義を整理し、丁寧に比較検討している。また、加藤幸治は、やはり自身のこれまでの博物館学芸員としての仕事の集大成としてまとめた『紀伊半島の民俗誌』の中で民具の定義とこれからの物質文化研究の可能性について述べている。559 ページにおよぶ大著の中で「はじめに」と第一部の序において、「古典的な民具観」と対比させながら小谷方明、朝岡康二、近藤雅樹らの「流通民具論」をふまえた民具の定義について考察している。

それ以外の民具研究者もそれぞれの民具観、民具の定義にふれてきた。また、民具学会創設時期の『民具マンスリー』には、さまざまな民具観や民具の定義が試みられたようすがうかがえる。

本論では、このいちいちについて論じないが、さまざまな民具の定義が行われてきたということをおこでは、確認しておきたい。

4. 柳田国男と民具

柳田国男は、民具研究に無関心・無理解だったとよくいわれる（鈴木 1983：p. 43）。しかし、鈴木通大が指摘するように、柳田国男は民具研究に関心もあり興味も持っていた（鈴木 1983, 1984）。また、鈴木は「柳田は渋沢敬三への土産として旅行先で民具を収集すると、よく弟子たちに届けさせたという逸話がある」とし、現在アチック・ミュージアムの資料を収蔵している国立民族学博物館の資料から「柳田の名によって、一九二九年に栃木県宇都宮市の面（干瓢皮製）、千葉県夷隅郡勝浦町の真菰馬、長野県松本市の七夕人形など十数点を収集してアチック・ミュージアムへ寄贈していることが確認できた」という（鈴木 2010：p. 23）。

柳田国男には民具研究の著作がいくつかある。『定本 柳田國男集』第 14 巻には「木綿以前の事」、「のしの起源」、「手拭沿革」など柳田の仕事の中でも民具研究に関するものが集められている。また、『定本 柳田國男集』第 21 巻には、子供向けに書かれた著作が収められているが、『火の昔』全編、『村の学童』所収の「母の手毬歌」、「三角は飛ぶ」、「棒の歴史」などが民具研究といえる。

「木綿以前の事」について渡辺誠は「木綿・綿布が庶民の衣服の歴史にいかにか画期的であったかが実によく描かれている」としている（渡辺 2002：p. 82）。もっとも、「批判されるべき側面」と

して国際的背景や階層性が無視されている点を指摘している（渡辺 2002：p. 82）。

「手拭沿革」について近藤雅樹は「渋沢敬三が目ざした民具研究とは違った視点からの民具研究の可能性を、柳田はこの報文によって明示した」と位置づけ、さらに「これは、渋沢が柳田流の民俗学研究を批判したことに対する、柳田一流の婉曲な反論だった」とした（近藤 2002b：pp. 207-208）。

「母の手毬歌」について益田勝実「ゴムまりが乏しい戦時下の現状、ゴムまり以前の木綿のかがりまり、それ以前の揚げまりと、手まりの変遷を語っている。新しい素材である木綿の出現によって、揚げまりからつきまりへ変わり、そこではじめて自分の手とからだを自在に操るおもしろさが倍増したことも説いている」とまとめている（益田 1976：p. 325）。

「三角は飛ぶ」は屋根に焦点を当てながら日本の家屋の種類と歴史の変遷を、「棒の歴史」は運搬の道具に焦点をあて、物を運ぶ技術と職業の歴史の変遷をそれぞれわかりやすく書いたものだ。

自身が書いたものだけでなく、自らが企画した『炉辺叢書』の一冊として宮本勢助の山袴の研究を加えようとしており、勢助の自宅を訪ね、刊行を勧めたという（宮本瑞夫 2003：pp. 13-14）。宮本勢助はこの後、アチック・ミュージアムの顧問格になった人で、息子の馨太郎はアチックの同人となる。結局この本は炉辺叢書としては出版されることはなかったが、柳田が早くから宮本勢助の民具研究を評価していたことがわかる。早川孝太郎はこの辺の事情を「嘗て郷土研究社の炉辺叢書の刊行予告に、宮本さんの山袴誌が予告されて居たのも久しいものであった。（中略）あの本の刊行の動機は、柳田先生がジュネバから帰られて炉辺叢書の刊行計画を樹てられ、一日宮本さんを尋ねられた事にあったやうである」と記している（早川 1943：p. 100）。大正13年6月15日刊行の炉辺叢書『筑紫野民譚集』の巻末の続刊の案内に「山袴誌 宮本摺衣氏」とある。「摺衣」は勢助の筆名である。同じ案内には「藁屋根写生集 大熊喜邦氏」というのもみえている。大熊喜邦は建築家で白茅会⁽¹⁾のメンバーでもあり、『東海道宿駅と其の本陣の研究』などの著書もある。『藁屋根写生集』も炉辺叢書としては未刊であるが、柳田が物質文化に関心があったことがうかがわれる。

これだけ、民具に関心がありながら、なぜ柳田は民具に関心がなかったと云われるのだろうか。おそらく、筆者が想像するに、実際に柳田国男は渋沢敬三の民具研究に否定的だったのだと思う。渋沢は「自分らが特殊の敬愛と愛情とを持つ民俗学に、今まで、生物学的とでもいいような、実証的研究法があまり用いられておらぬことを、いささか不満に思っていた」といい、2,000点ほど集まった民具を見ていると「動物の種属名のように、ワラジ・エチゴエンシスとでも名付けたくなるほど、その標準名なり学名なりが欲しくな」り、「系統へと研究が進むと（中略）一種の分類学は成り立つとさえ思われる」といっている（渋沢 1933：p. 167）。後にワラジをレントゲン写真で撮影するなど、実証的、科学的であろうとする渋沢のこうした方向性を、柳田はかなり早い段階から「疑似厳密性」⁽²⁾として懐疑的にみていたのではないだろうか。また、宮本常一によれば、「民俗学は年代のない歴史だといわれて来たが、渋澤は年代はあるのだと信じていた。年代のない歴史はない。民衆はちゃんとした歴史を持っている。そしてそれは方法によって発見できるものだ」と信じていた」という（宮本常一 1985：p. 4）。この宮本常一の言葉を信じるならば、柳田の民俗学における歴史認識とは相容れない考え方を渋沢は持っていたことになる。柳田国男の民俗学における歴史の尺度は相対的なもので、例えば『木綿以前の事』のようにエポックとなる出来事があり、その前か後か、その直後か、だいたい後かなどしか、民俗学の方法ではわからない。それ以上の具体的な年代は、文献史学なり、考古学なりの方法、もしくは成果を利用しなければ絶対年代まではわからない。それを無理に、歴史だから年代があるのだ、というのはやはり、疑似厳密性の追求

になってしまう。

これは推測でしかないが、柳田にはかなり明確に渋沢の民具研究の限界が見えていたのではないだろうか。その予感はある程度あたったのだと、私は思う。

日本における物質文化研究のレビューとしてよく引用される祖父江孝男らの「物質文化研究の方法をめぐって」では、「アチック・ミュージアム以来の民具研究のような研究方法でめばしい結果は得られないのではないかという甚だ冷たい評価」があると指摘し、さらに「アチックの研究は『破産』したという話しも公にされているくらい」だと紹介されている（祖父江ら 1978：p. 289）。また、渋沢自身も晩年、宮本常一に「若いときから大勢の協力によって民具を蒐集してきたけれど、どうも好事家の蒐集とおなじことになってしまった。それを足場にして研究を進めようとする人がほとんどいない。民具に関する知識をもう少し早い時期にみんなで整理しておくべきだったね」と述懐していたという（宮本常一 1978：p. 67）。

もちろん、宮本常一が指摘するようにこの述懐は渋沢の謙虚さと理想の高さを示したものだともいえる（宮本常一 1978：p. 68）。また、祖父江らの議論も「アチック・ミュージアムの研究法を全面的に否定しようというのは大きな誤りであり、むしろアチックの方法を現在ならば更にいっそう深めてゆくこと」ができるとし、「アチックの民具研究の遺産を受けついで『物質文化を中心にした文化の全体的把握』といった方向へ」と、民具研究／物質文化研究の進むべき道を示している（祖父江ら 1978：p. 289）。

柳田国男と渋沢敬三の関係は複雑⁽³⁾で、柳田にも遠慮があり多くを語らないことが、かえって柳田が民具を否定的にとらえているとの憶測へとつながったのではないだろうか。

柳田は、民具研究が無意味だとは思っていなかった。しかし、渋沢敬三とは方法を異にしていた。そして、渋沢流の民具研究の困難さを見抜いていた。近藤雅樹は「どちらの方法が民具研究の主流になったか。少なくとも、次々と成果を獲得して優勢に立ったのが柳田流だった」と指摘している（近藤 2002b：pp. 207-208）。

5. 「民具の定義」の意義

柳田国男と民具研究との関係を見たところで、「民具の定義」の問題に戻りたい。術語を定義するということが学問の出発点のように考えられているが、柳田国男は定義をしない人だった。だから、柳田の文章は学問ではないとか、民俗学は学問ではないということがいわれるのであろう。

柳田が言葉の定義をしないのは、彼が学問的ではないからでも、文学的すぎるからでもない。柳田が定義をしないのは、彼が言葉を知り尽くしているからだ。言葉は、定義しても、その定義をすり抜けていく。あるいは、定義したとたんに誤謬性を帯びるといってもいいかもしれない。

言葉の意味は文脈の中からしか立ち上がってこない。あらかじめしろ、さかのぼってしろ、言葉は定義することができない、というのが柳田の考えだろう。

筆者は以前、柳田国男の「国語」観について論じたことがある（小島摩文 2002, 2003）。柳田はさまざまな著作の中で「国語」「標準語」「方言」という言葉をそれぞれ一度も定義せずに使っている。しかし、丹念に読んでいけばそれが何を示そうとしているかはあきらかである。

民具の定義も定義すればするほど、その外延からもれるものがでる。ある具体物を民具とするために民具の内包をいじってみる。しかし、そうすると今度は民具に入れたくないものが入ってくる。これまでの民具をめぐる定義はその繰り返しかえしだったように思う。

定義とはそもそもそういうもので、そうして鍛えていくものだという考えもあるだろう。しか

し、やはり民具は定義し得ないものなのである。それはその出自から本質的に抱えている問題でもある。

筆者は、民具研究は民俗学の一分野と位置づけているので、民俗学の資料としての民具は、歴史をさかのぼることのできる物質資料、あるいは歴史を再構成するための研究に資する物質資料だと考えてきた。したがって、民具らしい民具も、民具らしくない民具も歴史を明らかにできる力を秘めているものは何でも「民具」だと考えてきた。大島暁雄はすでに 1983 年に「民具とは物質文化の民俗学的研究に用いられる研究上の概念である」として、「物に即して民具を規定しようとする従来の考え方に対して、民俗学を研究する研究者の主体的な問題意識にもとづいて「その研究を進めるうえで有効と考える物質文化をすべて民具とする」ことを提案している（大島 1983 : p. 14）。これは近藤雅樹の、民具は「生活文化の様相を明らかにするために不可欠な物証として、その製作技術や使用状況を知ることができる伝承性によって評価される。逆に言えば、伝承的な日常の営みに供される物品であるかぎり、あらゆる物品が分析概念としての民具という言葉によって包括され、研究対象になる」という提案とほぼ同じ事である。小島、大島と近藤との違いは、歴史学／民俗学としておこなうのか、物質文化研究なのかということになるだろう。

しかし、このように無限に「民具」を拡大していくことは可能なのだろうか（筆者はこれまで、可能だと考えてきた）。

6. もう一つの「民具論」

柳田国男が物質文化に興味がなかったといわれる一方で、柳田が関わった民俗学の入門書である『民間伝承論』（昭和 9 年刊）と『郷土生活の研究』（昭和 10 年刊）では、民俗資料を三つに分類し、その第一に「有形文化」をあてている。この有形文化は「生活外形、目の採集、旅人の採集と名けてよいもの、之を生活技術誌という」こともできるとしている（柳田 1934 : p. 10）。

この分類は「外国でもだいたいこのとおりにやっている」と柳田自身が断っているように柳田のオリジナルではない（柳田 1934 : p. 97）。

また、折口信夫も『日本文学大辞典』（昭和 9 年、新潮社）の「民俗学」の項目で民俗学分類項目の一つとして「造形伝承」をあげている。昭和 12 年の講演では民間伝承の種類をあげる中で「物体伝承」という言葉も使っている。また折口は、「柳田先生のほうは、これ（造形伝承：筆者注）を大事にしておられないが、アチック・ミュージアムの方で重きをおいて着物や帽子その他の研究もしている」と紹介している（折口 1971 : p. 85）。⁽⁴⁾

柳田も折口も「民具」という術語を使っていないが、いわゆる物質文化を民俗学の範疇にいれている。柳田は民俗資料の第一に有形文化を持ってきたが、それは、まず目につくものであり、初めての人でもわかりやすいものだからだ。先に紹介したように、柳田の民具研究が子供向けの著作に集中しているのもそのためだろう。折口も「民俗学にはいるためには、造形伝承からはいる方が」入りやすいと指摘している（折口 1971 : p. 85）。

では、なぜ「民具」という用語を使っていないのだろうか。和田正洲は「民具という造語を折口信夫や有賀喜左衛門が使わず造形伝承あるいは造形物としたのは、民具という造語に抵抗感があつた上、それぞれの分野の術語として不適當であつたため」と推測し、前項で紹介した大島暁雄の民具の規定では「造形伝承のほうがより適切」だとした（和田 1984 : p. 21）。

その上で次のように述べている。

民具の概念に、家屋等施設を含めることが不自然だということは、恐らく渋沢敬三がこの語を考えついたとき、そのコレクションの範囲内で考えたためであろう。すなわち道具はあっても家屋そのものは考えていなかったと思う。それゆえこの語のもつ意味ないし言語感覚があまりに具体性がありすぎ、抽象的な術語に意味を付加していく、あるいは限定していくのとは条件がことなると思う。(中略) 鉄筋アパートを指して「これは民具である」といって果たして納得がいくであろうか。たびたび使っていれば馴れてくるという意見もあろうが、それはみずからの手でみずからの言語感覚を麻痺させることではないかと思う。

(和田 1984 : p. 21)

和田は、「民具」という語を否定するものではないし、むしろ「短い言語で端的に内容を示した用語をもたらした渋沢敬三の功績は大きい」としながらも、宮本常一が『民具学の提唱』の中で「民具は有形民俗資料の一部である」としたことに注目し、「民具は宮本常一説のごとく、手足で動かせるもの、民衆が使用したものとした方が至極明快であり、民具のもつ言語感覚あるいは語感にも忠実ではないかと思う」と述べている(和田 1984 : p. 22)。

さらに和田は「造形伝承と博物館」では次のように述べている。

ことに民俗の場合は単に民衆生活の変遷を示すだけでなく、現代とのかかわり、あるいは都市の民俗等についても積極的に扱っていかなければならない。民俗学の一つの方向、とりわけ博物館の民俗学にとっては、現代とのかかわりが大切であり、新しい文化に民衆がどのように対応し、あるいは民俗の何が変化し何が残っていくか観察し記録していかなければならないのではないかと思う。(和田 1984 : pp. 23-24)

和田は具体例として「足踏み脱穀機はもちろん、耕耘機、電動式草刈機なども民俗資料として扱」い、「漁村を控えた地域の博物館では、消滅しつつある焼玉エンジンの漁船をも収蔵可能な博物館が必要」だとし、そんな「一地方の民俗の変貌を詳細に観察」することができるのは「大学よりも地方の博物館でこそ可能だ」と造形伝承研究の方向性も示している(和田 1984 : p. 24)⁽⁵⁾。

「民具」という術語を「造形伝承」としただけで、民具研究が抱えていたさまざまな懸案は、軽々と解消してしまった感がある。結局のところ民具研究は土俗学からの資料範囲を超えないところでとどまる慣性と、変化していく生活文化とのきしみの中で喘いでいたのではないだろうか。

加藤幸治は、流通民具論を論じた論文の注で、「流通民具研究という用語はあまりよい表現ではないと考える」と表明している(加藤 2010 : p. 44)。もっともこれは「流通」という言葉に問題を感じているようで「民具」の方ではない。2012年に刊行した『紀伊半島の民俗誌』の注では「その意義が誤解されている」と変更されている(加藤 2012 : p. 256)。初出一覧で「原論文とは大きく異なるものとなった。筆者の研究過程で起こったことである」とあるので(加藤 2012 : p. 256)、「流通民具研究」という術語を承認したということであろう。しかし、「流通民具」を論としては評価しながら、用語としては違和感を持っていた当初の感覚は率直な思いだったと筆者には思われる。造形伝承論とあわせて考えると、「流通」する「民具」というのは誰もが違和感を持つだろう。「流通」を狭義に取り「商業的取引」と考え、「民具」は自給自足のものとすれば「流通する民具」はあり得ないし、「流通」を広義に取り交換や伝播も含めれば「流通」しない民具はないのであって、いずれにしても据わりの悪い言葉である。その違和感が術語としてのパワーをもつ

とも考えられるが、「民」の語感、「具」の語感を考えると「よい表現ではない」ように思われるという感覚に賛成する。流通民具の「意義が誤解されている」と嘆いているが、用語の面構えが原因である部分は大きいと思う。

柳田国男は、民間伝承の会を日本民俗学会に名称変更する際、最後まで反対したという⁽⁶⁾。これなども名称への強い思いであろう。単に会への思いというよりは「民俗」という言葉がもつ魔力に敏感に反応したのではないだろうか。柳田の危惧は、いま民俗学をめぐるさまざまな言説をみると当たったような気がする。民俗を研究すれば民俗学か。民間伝承を研究するとは歴史の研究である。しかし、今、民俗学を研究する人の多くは民俗を社会学的に、文化人類学的に、考現学的に、風俗研究的に研究しているようにみえる。

民具研究も結局はその「民具」という言葉がもつ魔力によって、近藤雅樹のいう「古い民具観」に囚われ続けているのではないだろうか。

7. 民具は定義すべきか

民具の定義をめぐる問題をみてきた。学問にとって定義は重要である、なくてはならない、と言われている。定義しなくては学問は成り立たない、とも信じられている。はたして、そうだろうか。先に紹介した小林茂は、民具の定義をめぐる問題を論じるにあたって、次のよう語り始める。

地域の民俗・民具調査では「民俗とはなにか」「民具とは何か」といった概念の定義は俎上にはのぼりえない。ただ、調査者個々人がそれなりの、あるいは漠然とした概念に近いものをおもひ浮かべながら仕事を進めているにすぎない。(小林 2007 : p. 363)

「民俗」「民具」の概念規定などは、調査者にとってほとんど意識されえない事柄である。むしろ概念の規定などは、先駆的な学者がすでにすませてくれているのだから、あまり立ち入ることなしに、調査者が「民俗」と感じ「民具」と感ずるものを調査・収集・記述すればよいということになる。(小林 2007 : pp. 365-366)

実態をいえば、多くの研究者が意識しているか、無意識かは別にして、小林と同じように調査し、研究しているのではないだろうか。

加藤幸治は、従来の民具研究を批判する中で宮本常一と宮本馨太郎をとりあげ、「宮本常一は極めて民俗誌的な生活の理解を目指し、宮本馨太郎はモノの歴史的展開を緻密な文献と聞き書きデータの総合化によって、身近な衣食住の推移を風俗史的に描こうとしている」にもかかわらず、「この二人がともに、民具研究の対象設定に関する議論において、なぜ非常に強固な本質主義に陥ってしまうのか」といぶかしがっている。

これは、不思議なことでも何でもなく、小林茂の告白のように、実際の調査研究の際には定義や理論はじつはあまり考慮していないのである。現実の研究では、定義より先に対象が存在していることが多い。それを整理し、定義を試みるのだが、普通はあまりうまくいかない。先に柳田国男の例を引いたが、言葉は定義するそばからすり抜けて行くからだ。だから、宮本常一も宮本馨太郎も定義と研究とは乖離しているのだ。そして、筆者はそれが普通だと考えている。

これは、なにも筆者の勝手な思い込みだけではない。科学哲学で独自の地位を築いてきたファイヤアーベントは、言葉は先に定義されているのではなく、定義の「明瞭化はこの役割のさらに詳細な研究から生じるのでなければならず、空隙はこのような研究の結果によって満たされねばならな

い」として「われわれは未だ説明されていない用語を用いて議論し、それに対してはまだ明瞭な使用の規則が利用できない文を用いることを学ばなければならない」と述べている（ファイヤアーベント 1981：pp. 344-346）。

小林のいうとおり、「調査者が『民俗』と感じ『民具』と感ずるものを調査・収集・記述すればよい」のである（小林 2007：p. 366）。私たちは、定義されていなくても、理論化されていなくても、フィールドでそれに出会ったときに、これは研究対象だとかぎ分けているのである。それは、初学者でも熟練者でもそれぞれの蓄積に応じて立ち現れてくる瞬時の判断である。

民俗でも民具でもそれが研究対象となるか、ならないか、とくに自分の個人的な研究対象になるかならないかは、何かの定義によるわけではない。定義され得ない「不明瞭で十分に正確ではない」なものに立ち向かっていくのが科学だ、というのがファイヤアーベントの哲学であろう。

小林は、定義よりも分類の方が切実な問題だとして、全国的な比較ができるように調査の際は『民俗文化財の手びき』（第一法規出版 1979）に準拠していたといいながら、しかし、「民俗事象には、時にこれらの分類を横断しても調べてみたくなるような事象に出会うこともある」として「全国的に統一した記述を越えて進めなければ、新しい発見も得られない」と述べている（小林 2007：p. 365）。また、実際の筌の調査では、プラスチック製や金網製などの新しい素材や市販品なども調査研究の対象としている。

近藤雅樹がいう「古典的な民具観」とらわれた研究者もいたかもしれないが、しかし、多くの研究者は、渋沢敬三や宮本常一の定義はさておき、眼前で興味を引かれたものを調査し、発表してきたのではないだろうか。

8. 民具研究はいつはじまったのか

ここまで見てきたように民具研究は、現在では造形伝承研究と言っていい状況になっている。しかし、まだ、本論では民具研究という名前で論を進めていきたい。

いわゆる民具研究は渋沢敬三の郷土玩具の研究からはじまり、アチック・ミュージアムが本格的に稼働することで盛んになってきたと考えられてきた。民具という術語が渋沢敬三によって作られたことを考えると、厳密に言えば「民具」研究は、渋沢敬三以降ということなる（小島摩文 2002b：p. 65）。

しかし、日本には比較的古くから物質文化研究の流れがあった。角南聡一郎は「モノを図化すること」の中で、本草学の流れを紹介している。平安時代に編纂された『本草和名』（918）にはじまり、江戸時代には中国から『本草綱目』がはいり、本草学、博物学が盛んになった。貝原益軒『大和本草』（1708）、稻生若水『庶物類纂』（1738）、田村藍水『琉球産物志』（1770）などが出版され、さらに中国の百科事典を元にした寺島良安『和漢三才図会』（1712）、フランスの百科事典を翻訳した『厚生新編』などが絵入りで発刊された（角南 2011：p. 410）。

日本版百科事典として、屋代弘賢が幕命をうけて編纂した『古今要覧稿』には多くの図版が使われている。1821年（文政4）から編集作業に入り、弘賢の死去により未完に終わり、明治に入ってから洋装丁で発刊された。屋代弘賢は日本で初めてのアンケート調査といわれる「風俗問状」を実施した人物でもある。

技術史の分野では『天工開物』の影響も大きい。貝原益軒の『花譜』（1694）や『大和本草』（1708）の参考文献に「天工開物」が挙げられている他、下記にあげる新井白石の『本朝軍器考』（1736）や平賀源内の『物類品隲』（1763）などにも引用されている。明代末に宋応星によって著

された技術書であるが、中国ではほとんど顧みられることがなかった。日本では広く受容され、木村兼葭堂所蔵本を底本として和刻本が1771年（明和8年）に刊行されている。産業技術、農業技術をはじめ、図化の技法や物質文化研究にも影響をあたえたと考えられる⁽⁷⁾。

有職故実の流れもある。有職故実は、もとは貴族社会のしきたりについての知識の事であったが、武家の台頭にともない、武家のしきたりもあわせていうようになっていった。日野西資孝の記述がまとまっているのでそのまま引用する。

（江戸中期になると 筆者注）公家をはじめ武家・民間の学者の研究もしだいに深まり、室町時代の断片的な記述から体系的な研究にすすみ、故実に関する成果をあげるにいたった。その主たるものをあげると、武器武具に関するものでは新井白石の『本朝軍器考』をはじめ、伊勢貞丈の『武器考証』『座右書』、栗原信充の『武器袖鏡』『刀剣図式』『鞍鐙図式』など、鎧や装束については新井白石の『武家官位装束考』、大塚嘉樹の『武家装束類聚』をはじめ、伊勢貞丈の『直垂考』以下数編におよぶ装束の考証、松岡辰方の『武家当時装束抄』、本間百里の『服色図解』『尚古鎧色一覧』などがある。なお武家一般に関するものでは塙保己一（はなわほきいち）の『武家名目抄』300余冊があり、伊勢貞丈には『安斎随筆』『貞丈雑記』『四季草』など断片的ながら広い考証があり、また屋代弘賢には『古今要覧稿』の大著があった。（中略）民間でも考証随筆の風がさかんにおこった。（日野西1988）

ここでは屋代弘賢の『古今要覧稿』は有職故実の流れに位置づけられている。

また、茶書の伝統もあり、茶道具や茶室のしつらえなどが図化され残されてきた。室町時代に編纂された『君台観左右帳記』は中国伝来の絵画と工芸品の鑑定評価と、それらを座敷飾にするばあいの構成などを集大成した秘伝書で、座敷での道具の配置図や巻末には道具の図などがある。元禄7年（1694）に出版された『古今和漢万宝全書』は江戸時代の美術工芸などの事典で、印伝や、茶道具、刀などが絵入りで紹介されている。松江藩第7代藩主で茶人でもあった松平不昧が編纂した『古今名物類聚』は江戸時代を通じての名物茶器を記した最高の書といわれ、戸田勝久は「本篇の採寸・図記の態度も真摯である」と評価している（戸田 1985：p. 734）。茶会の記録や名物を記録したこうした茶書は明治になるまでに1万点ほど作られていたといい（熊倉 1988：p. 143）、そのうち、名物記、茶器寸法書などが図版のある書になる。

それから、これまでも民具研究でよく利用されてきた農書がある。農書は、いわば農業の指南書であるが、そのなかに農具などが図化されているものもある。特に大蔵永常『農具便利論』文政5年（1822）、大坪二市『農具揃』慶応元年（1865）などは詳細に農具について扱い、図化もしている。

また、江戸時代はたくさんの随筆も著述、出版された時代でもある。その中には民具研究の対象となるものも描かれている。例えば柳亭種彦の『用捨箱』には、うどん屋、餅屋、質屋の看板などが別々に扱われ、その分布や変遷などが考察されている。この中で、今回たまたま開いて興味深かったのは「鍋取、柄杓之古製」という項目で、「鍋取公家」という言葉からはじめて鍋つかみについて考察している。この中に出てくる「老懸（おいかけ）」は「綏」とも書き、武家の正装の際、冠の左右に付ける馬の尾の毛でできた飾りの事である。

鍋取公家というふはいやしめていふにあらず。老懸をかけたるをいへるなり。老懸を俗に鍋取、又釜取ともいふ。さて今厨にて鍋取をもちいふる家たまたまはあれども、藁鞋、足半の形に作れり。古

製はしからず。ちひさき扇の形したるが、彼老懸に似たる故にしかいひしなり。左に摸（うつ）しし画にて其製（つく）りざまを見給ふべし（柳亭 1841：pp. 116-117）。

として、「百鬼夜行」の鍋の変化の図画をあげてあり、そこに出てくる鍋取を図示している。そのあと、いくつかの文献をあげ、鍋取を老懸の意味として使っている例や老懸を鍋取とよぶことをたしなめたりしている例などをあげて、最後に「今は老懸を知らざる者なく、厨の鍋取は見ざる人おほかるべし」とまとめている。

鈴木重三は、『用捨箱』について「近世初期の市井の風俗や言語などについての考証が大部分。（中略）ほとんど刊年の明確な俳書を援用して実証し、また古版本の挿絵や古画を模写、透写して多数載せて画証としており、所説に信憑性が高い。引用資料中には現存不明のものもあり、資料的価値も高い」と評価している（鈴木重三 1988：p. 137）⁽⁸⁾。

これに対して、現代の『日本民具辞典』では、鍋摺は次のように説明されている。

なべつかみ【鍋摺】火にかけた鍋は熱いから素手で弦を持つわけにはいかない。そこで襷袢（ぼろ）などを縫った鍋摺を用いた。鍋は釜と違い、頻繁に鉤（かぎ）にかけたりおろしたりするため、鍋摺は囲炉裏周りの必需品であった。（日本民具学会 1997：p. 412）

どちらが民具研究として優れているかは一目瞭然だと思う。鍋取の変遷をたどり、バリエーションに言及している点で種彦の方が優れている。現在の民具研究に対して江戸時代の民具研究が全くひけを取らないばかりでなく、優れているとさえいえる。

見てきたように、すでに江戸時代には民具研究の萌芽があらわれていた。いや、民具研究はすでに江戸時代には、はじまっていたと考えてもいいのではないか。次のその例を紹介したい。

9. 民具研究事始

アチック・ミュージアムの同人、高橋文太郎は『アチックマンスリー。』第4号に書いた「民具の研究」の中で次のように述べている。

凡そ民具といふ種類に入る物の研究にもいろいろな方面があるようである。古くは滝沢馬琴の耽奇漫録などにみられる生活道具のごく趣味的な記述や岩瀬京伝の骨董集などにみる随筆的な研究などがあつた。（高橋 1935：p. 13）

江戸時代にも「民具」の「研究」があつたことを認めながら、しかし、この後に続けて「斯ういふ種類のいわゆる随筆学者の研究には別段之といふ学問への目的もなかった」として学問的意義を否定し、それに対してアチック・ミュージアムがおこなってきた生活に関する用具の研究は民俗学的、考古学的、歴史学的な研究であり、これまでの民具研究とは異なり科学だと主張している（高橋 1935：p. 13）。

筆者は、高橋の「随筆学者」へのこうした態度を「新しい学問を建設しようという高揚感の中で前時代の学問を否定的にとらえ、それを乗り越えようとする論調はむしろ自然の流れであるが、それであればこそ『随筆的な研究』への高橋の評価もバイアスのかかったものだと理解しなければならない」と指摘した（小島摩文 2002b：p. 65）。

高橋が「随筆学者」として批判した滝沢馬琴は『南総里見八犬伝』などでよく知られている戯作者だが、随筆も多く著している。その中に『兎園小説』という稿本がある。馬琴は文政八年(1825)に奇事異聞を披講し合う会を主催した。この会には、先に紹介した『古今要覧稿』の編者屋代弘賢や考証家として知られた山崎美成など十数名が参加していた。その成果をまとめたものが『兎園小説』である。

『兎園小説』は民俗学でも、つとに利用されており、南方熊楠が『十二支考』の「馬に関する民俗と伝説」で引いている他、柳田国男も「昔の踊と今の踊」「越前万歳のこと」「うつぼ舟の話」(『妹の力』)、「民謡雑記」(『民謡の今と昔』)、『山島民譚集』、『巫女考』などに引いている。

この兎園会第1回目の会で滝沢馬琴が取り上げたのが「ひやうし考」(以下「ひょうし考」)である。「ひょうし」は馬を制御するための道具である。

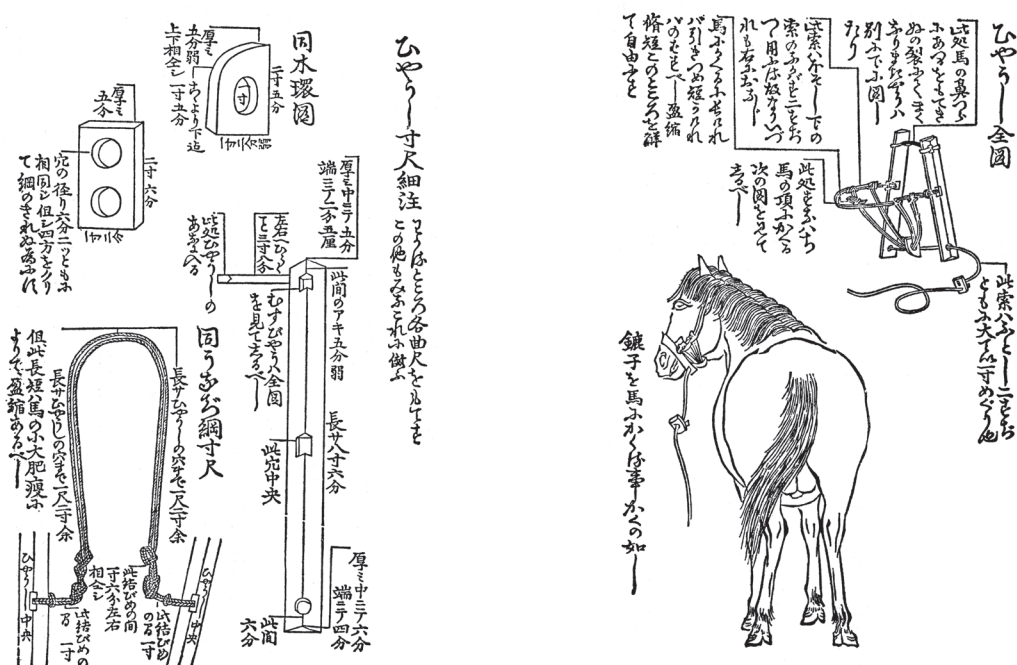
「ひょうし考」については、別のところすでに詳述しているので(小島摩文 1996, 2002b)、ここでは実測図と装着図を掲載し、要点だけ述べる。

滝沢馬琴の「ひょうし考」は、以下の5点から、民具研究として成立していると筆者は考える。

- ①実物を観察していること
- ②実測図を作成していること
- ③名称に関する考察をしていること
- ④材質や構造に注意をはらっていること
- ⑤考察の結果得られた知見を古典の注釈に活かしていること

柳田国男は「古書保存と郷土」の中で、「随筆はおそらく昔流行した謙遜なる書名の一種」だったのに、やがて本当に取るに足らないことまで随筆と銘打ってあればいいように考えて保存する意味のない本が増えてしまった、と嘆いている(柳田 1933: pp. 163-164)。

図1 実測図「兎園小説」『日本随筆大成』



第二期第1巻、吉川弘文館、1973: pp. 24-25

そうした粗雑な物に引きずられて、よいものまでも「別段之といふ学問への目的もなかった」ことになってしまったのではないだろうか。

10. 民具研究はだれが担ってきたのか

滝沢馬琴の「ひょうし考」を、筆者は民具研究のはじまりと位置づけた。先に見たように江戸時代には様々な物質文化が記録されるようになっていった。それを趣味的と批判することは容易だが、しかし、何の益にもならないものを集め書き残し、編集し、出版してきた彼らの営為は、無視されるべきではない。

そうした仕事をした人たちは、別の本業を持ちながら、知的好奇心に駆られて書き継いできた人たちだ。明治に入ってから、坪井正五郎らの周辺に集まった人たち、渋沢敬三の周辺に集まった人たち、いわゆる専門家ではない人々によって民具研究はおこなわれてきた。

本論集の論者である芹澤知広、志賀市子、角南聡一郎、中尾徳仁、榎林啓介はすでに『日本人の中国民具収集 歴史的背景と今日的意義』の中で民間人による民具収集について論じている。芹澤は序文の中で「ポピュラー人類学としての日本人類学」という項を立て、日本の民俗学を含む文化人類学が「専門的な政策科学というよりは、いわば『好事家』的な同好人士の集まりから出発したこと。そして、その後も植民地統治や軍事に直接関わることは少なかったこと」を指摘し、「専門知としての人類学の実践のほか、『ポピュラー人類学』ともいうべき、専門知以外の知識人の言説や実践、アマチュアによる収集、研究活動」があったことを紹介している（芹澤 2008：p. 12）。ポピュラー人類学には「人類学者以外の人々によって書かれた文化人類学的内容をもつ著作と人類学者が一般大衆向けに書いた文化人類学の著作の両方をふくめ」られているという（芹澤 2001：p. 216）。

ポピュラー人類学よりひろい学問分野での同様の状況を論じたものに鹿野政直の『近代日本の民間学』（岩波書店、1983）がある。鈴木正崇は、鹿野の「民間学」を次のように評価している。

鹿野政直はこうした動きを「民間学」と呼び、国家や政府に奉仕する官学アカデミズムに異議申し立てを行い、一般の人々の学問への自発性を喚起して持続することで、既存の学問を新たに組み替えたと評価した（鹿野 1983：p. 7）。「民間学」の大きな特徴は、「生活」を研究主題として浮かび上がらせて対象化したことで、担い手の「民衆」、生活を営む場の「地域」、生活の基調をなす「日常性」の復権をもたらし、生活様式としての文化の再発見に繋がった（鹿野 1983：pp. 201-202）（鈴木正崇 2010：p. 170）。

鹿野の「民間学」は1910年代から1930年代初めにかけての大正デモクラシーの時代を背景として成立した民間学を扱っていたが、1997年に出版された『民間学事典』では江戸時代からを民間学としてあつかっている。編者の鶴見俊輔は序文にあたる「刊行のことば」でつぎのように述べている。

「明治にあった思いこみは、海外にすぐれた学問の体系があって、それを早く学習し応用することだった。明治以前の学問とのつながりは、かくしてそこで断ち切られた」とし、未熟ながらもそこにあった江戸の学問とのつながりを官学は絶ってしまったとした。しかし民間では江戸の学問のあり方を受け継ぎながら「業績としては小さいなりに、並行して続いてきた」と指摘し、「その持続の意味をとらえ直し」た時、「民間学が文明開化によって顧みられなくなった明治以前の

学問の流れとつながりをもつこともあきらかにな」るとしている。そして、鶴見は「自分の生活を自分の問題の母体としてとらえ、問題を探りあて、それと取りくむことを学問」の一つの形だとすれば、いま学問が抱えている問題は、学校で学問を教わることだとして次のように問題を指摘する。

人は生まれてくるやいなや問題に投げ込まれ、問題を背負わされ、問題を探りあてようとし、問題と取りくむ。学校はそういう問題をかっこにいれる。(中略) 学校制度は、問題を作る力を教師のみに与えて生徒からはぎとる。学校を終えてからどれだけの人が自分の問題にもどってくることができるのか。学校にいる期間がながくなればなるほど、そして、その後その人が学問を職業にする場合にはそれはさらにむずかしなる。専門家の学問がそうして成り立つ。(鶴見 1997 : p. i)

現在の大学アカデミズムに対する痛烈な批判である。すなわち学問自体が学校化しているということだ。イバン・イリイチらの指摘した問題は学問も逃れていない。

柳田国男も『民間伝承論』の序文で「学問が実際生活の疑惑に出発するものであり」(柳田 1934 : p. 2)、民間伝承論／民俗学は「職業としては発達しなかった」(柳田 1934 : p. 8) が、「学問と道楽との差は、必ずしも之に由って衣食すると否とに由るものでは無い」とし、「偉大なる人間研究の片端であり、真理の殿堂の一礎石であることを意識することによって」学問として成立するのであって、職業的な専門家だけが学問を成すわけではないとしている(柳田 1934 : p. 10)。

だから、自分の村の問題であったり、身近な出来事への疑問であったり、あるいは日本人とは何かとか、人とは何かなどという素朴な子供らしい疑問からはじまった学問ではなく、大学に入って専攻がたまたま民俗学だったので民俗学をやっています、というような民俗学を私は「学校民俗学」とよんできた。

学校茶道や学校華道とおなじように、それぞれの流派の大事なところは捨象してしまっ整理したものをつかう。あるいは学校文法のようにいろいろある学説の一つだけが採用されてあとはなかったかのように振る舞ってみたり、あるいは、仮名と変体仮名のように何の区別もなかったものがある日突然区別され、一方はすでに外国の文字以上に見知らぬ文字に押しやられてみたりと、理不尽に理由もなく取捨選択され、しかもそれが当然であるかのようにおこなわれてしまうのが学校という場所なのだ。それは小学校のみならず、大学でも同じ事である⁽⁹⁾。

「明治にあった思いこみは」まだ続いていると鶴見はみており、「学問にとって海外からの刺激が多くなるにつれて、私たちが自分の問題から目をそらす口実としてその刺激を活用する機会もふえ」、それは「当然に学問の中に大勢順応の傾向がうまれる。学問を自分の問題から切断する習慣も、新しい装いをもって官学のなかに再生する」と、問題提起している。しかし「この一三〇年間の日本の民間学を実際以上に大きくみることを自らに戒め」なければならないとし、その上で、「ゆっくりと、学問の気風の転換をもとめる」としている(鶴見 1997 : p. ii)。

芹澤知広は「今日『文化人類学』(民俗学を含む)として日本で位置づけられている学問分野は、かつては物質文化研究を通じ、考古学や博物館学との豊かな協働関係を持っていた。今日その関係を復活させ、文化人類学の研究を発展させていくべきである」と述べている(芹澤 2008 : p. 11)。この研究会での物質文化を通しての取組がそうした鶴見の願いを実現する端緒であってほしいと願っている。

注

- (1) 白茅会は建築家と郷土研究家とが参加した民家研究会。早稲田大学の建築科を創設した建築家である佐藤功一と柳田国男が発起人となり、今和次郎、大熊喜邦、木子幸三郎、田村鎮の建築家と、郷土研究に関心のあった石黒忠篤、内田魯庵、細川護立らの合計9名が参加した。民家研究の嚆矢とされ1917年の発足以降、『民家図集第1輯』を刊行したが、その後自然消滅してしまった。この会をきっかけに今和次郎は民家に興味を持ち、後の『日本の民家』の出版につながっていった。こうした会を建築家とともに立ち上げたこと自体、柳田が物質文化に並々ならぬ関心を抱いていた証拠であろう。
- (2) ここでの「疑似厳密性」はファイヤアーベント『方法への挑戦』（新曜社 1981）の「解説めいたあとがき」の中で村上陽一郎が使っている用語である。「多義的にならざるを得ない」概念を科学的であることを装うために「曖昧性を削り落そうと」する行為を「疑似厳密性を追求」として表現している。
- (3) 宮本常一は『日本民俗文化大系 3 澁澤敬三』の第五章を「澁澤敬三と柳田国男」とし、その第1項を「血縁関係」とし、洪沢が「柳田を学者として知るだけでなく、家庭の人としての柳田を知る機会もきわめて多かった」とし、「とくに柳田夫人は家計その他のことについては澁澤を相談相手とし、澁澤はまたいろいろと指示、援助もしたのであった」と紹介している（宮本常一 1978：p. 80）。
- (4) この段落の記述は和田正洲の論考によった（和田 1984：pp. 7-10）。この引用のあと折口は「だが、極端な民家建築などは、民俗の外へつきだした方が安全である」とし「アチック・ミュージアムの仕事は主に経済史なので、そちらに住や生活経済関係のものを持っていけば、経済史と民俗学との区別が明確になる」として（和田 1984：pp. 10-11）、後には民具研究を民俗学と分けることを提唱している。和田の「造形伝承論」では折口信夫の物質文化への考え方の変遷についても述べられており興味深いが、本論では「民具」と「造形伝承」という術語に注目したため、割愛した。
- (5) 和田正洲は、さらに岡正雄の論を引きながら、「現在の激変する民俗社会、ことに農山漁村の比較的伝承的性格が維持されている社会でも、機械類との組み合わせの上で考えていかねばならぬ時代になっているのである。」とし、博物館学芸員のおこなう民俗学として、造形伝承研究の重要性と現代的意義を指摘している。
- (6) 鎌田久子の回想には次のようなエピソードが紹介されている。

柳田先生は、民俗学は学者のための学問ではない。普通の人々が学ぶ学問である。「民間伝承の会」という名称は、昭和十年から使っており、何故これで不都合か、と語気荒く、新しい学問を生み育ててきた者の苦勞をにじませて、断じてこの日本民俗学会という名称を承諾ならなかった。（鎌田 1996：p. 35）

柳田は「民俗学」の語を使うのをためらう理由をその都度いろいろ挙げているが、『民間伝承論』の中で、「民間伝承論」という名称は（中略）誤解者もないぐらいに流行の狭い一語である。私は心おきなく公にその意味を限定することができると思ふ」と述べており、「民俗学」という語を手垢がついた、意味の拡散しやすい語として捉えていたと考えられる。

- (7) 近畿民具学会の事務局だった原野農芸博物館では『「天工開物」と日本民具 民具がつなぐ日本と中国』と題して1974年に展示をおこなっており、同名の図録も翌年発行している。『天工開物』に描かれている道具と同巧の日本の民具を展示するという試みで、『天工開物』研究の第一人者である科学史の藪内清、博物学の上野益三、染織史の後藤捷一らが協力した。関西の人脈を活かした展示といえよう。当時の関西での民具研究のありようがうかがえる。（原野 1975）
- (8) 鍋取も俳論から引用してある。寛永20年（1643）編の『油かす』所収の「公家と武家とはふたかしらなりなべとりをかぶとのわきにかざりつけ」という俳句を紹介している。俳諧や連歌、和歌などを資料として論を展開する方法は柳田国男もよく使う手法である。滝沢馬琴の「ひょうし考」も『定家卿鷹三百首』の中の一首から論を展開している。民俗学における代表的な方法であり、江戸期からの学問的伝統といえるだろう。
- (9) 筆者は柳田国男の『民間伝承論』『郷土生活の研究法』も柳田が自身の方法論を解説したものではなく、初学者でも簡単に採訪ができるようにつくった「簡便民俗学」だと思っている。柳田自身の方法論は柳田の論考自体から解き明かされなければならない。民具研究も定義や方法論について論じた論文で学史を研究するのではなく、調査、研究、報告それ自体から論者が何を考えてきたのかを論じなければならないだろう。

参考文献

- 朝岡康二 1999 「民俗学的な資料としての『モノ』とその記憶」国立歴史民俗博物館編『民俗学の資料論』吉川弘文館所収

- 岩井宏實 1985 「民具の概念」『民具研究ハンドブック』雄山閣
- 大島暁雄 1983 「民具研究の視点 一民俗技術論の試み一」『日本民俗学』145 日本民俗学会
- 小川直之 1991 「民具・技術論」日本民俗研究大系編集委員会『日本民俗研究大系 1 方法論』國學院大學
- 2002 「『アチックマンスリー』と民具研究論」『民具マンスリー』35-7
- 岡谷公二 2012 『柳田国男の恋』平凡社
- 折口信夫 1976 「国語と民俗学」『折口信夫全集』19 中央公論社
- 1971 「民俗学入門」『折口信夫全集 ノート編』7 中央公論社
- 加藤幸治 2010 「流通民具概念再考」『京都民俗』27 京都民俗学会
- 2012 『紀伊半島の民俗誌』社会評論社
- 鎌田久子 1996 「蓑笠—ささやかな昔—」『鎌田久子先生古希記念論集 民俗的世界の探求—かみ・ほとけ・むら』慶友社
- 鹿野政直 1983 『近代日本の民間学』岩波書店
- 熊倉功夫 1988 「茶書」『世界大百科事典』18 平凡社
- 小島摩文 1996 「東アジアひょうし図譜」『民具マンスリー』29-1 神奈川大学日本常民文化研究所
- 2002a 「柳田国男の『国語』観（一）」『国際言語文化研究』8 鹿児島純心女子大学国際人間学部
- 2002b 「江戸時代の民具研究—滝沢馬琴を中心として」民族藝術学会編『民族藝術』18
- 2003 「柳田国男の『国語』観（二）」『国際言語文化研究』8 鹿児島純心女子大学国際人間学部
- 小島環礼 1975 「民具学会にのぞむこと」『民具マンスリー』8-1
- 小林茂 2007 『内水面漁労の民具学』言叢社
- 近藤雅樹 2002a 「民具研究の視点」、香月洋一郎ほか編『講座 日本の民俗学 9 民具と民俗』雄山閣
- 2002b 「心象世界と民具」、香月洋一郎ほか編『講座 日本の民俗学 9 民具と民俗』雄山閣
- 渋谷敬三 1933 「アチックの成長」『祭魚洞雑録』郷土研究社（再録 宮本常一 1978 『日本民俗文化体系（3） 渋谷敬三』講談社）
- 1926 「おもちゃという名辞に就いて」『民具マンスリー』9-8、9
- 鈴木重三 1988 「用捨箱」『世界大百科事典』29 平凡社
- 鈴木正崇 2010 「『渋谷民間学』の生成」『神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報 1』神奈川大学 国際常民文化研究機構
- 鈴木通大 1983 「日本民俗学と民具研究の軌跡—民具研究をめぐる柳田国男と渋谷敬三を中心に—」『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』11 神奈川県立博物館
- 1984 「柳田国男と民具研究」『信濃教育』1176号 信濃教育会
- 2010 「アチック・ミュージアムの民具コレクション 26 柳田国男が収集した七夕人形」『民具マンスリー』42-11
- 2012 「アチック・ミュージアムの民具コレクション 33 柳田国男が収集した『七夕馬』（真狐馬）」『民具マンスリー』45-5
- 角南聡一郎 2011 「モノを図化すること—図化技術とその教育からみた日本人類学史と植民地—」山路勝彦編『日本の人類学』関西学院大学出版会
- 芹澤知広 2001 「異文化の描き方」住原、箭内、芹澤編『異文化の学び方・描き方』世界思想社
- 2008 「20世紀前半における日本人の中国民具収集」芹澤知広、志賀市子編『日本人の中国民具収集 歴史的背景と今日的意義』風響社
- 祖父江孝男・大給近達・中村俊亀智・大塚和義 1978 「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告 1 3-2
- 高橋文太郎 1935 「民具の研究」『アチックマンスリー。』4号 アチックミュージアム
- 鶴見俊輔 1997 「刊行のことば」鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂編『民間学事典 人名編』『同 事項編』三省堂
- 戸田勝久 1985 「古今名物類聚」『国史大辞典』5 吉川弘文館
- 日本民具学会 1997 「鍋糰」『日本民具辞典』ぎょうせい
- 早川孝太郎 1943 「尊き足跡—故宮本勢助氏のこども」『民族学研究』8-2
- 原野喜一郎 1975 原野喜一郎編『「天工開物」と日本の民具 民具がつなぐ日本と中国』原野農芸博物館
- 日野西資孝 1988 「有職故実」『世界大百科事典』29 平凡社
- ファイヤアーベント 1981 『方法への挑戦』新曜社
- 牧田茂 1969 『生活の古典』角川書店
- 益田勝実 1976 「解説」柳田国男『こども風土記・母の手鞠歌』岩波書店（岩波文庫）
- 宮本瑞夫 2003 「宮本勢助・馨太郎 民具研究の軌跡」『神奈川大学日本常民文化研究所論集 歴史と民俗』19, 平凡社

- 宮本常一 1978 『日本民俗文化体系（3） 澁澤敬三』講談社
 1979 『民具学の提唱』未来社
 柳田国男 1933 「古書保存と郷土」『退読書歴』書物展望社（再録『定本柳田国男集』23、1934、筑摩書房）
 1934 『民間伝承論』共立社
 1935 『郷土生活の研究法』刀江書院（新版『郷土生活の研究』筑摩書房 1967）
 柳亭種彦 1841 『用捨箱』（再録「用捨箱」『日本隨筆大成』7 吉川弘文館 1927）
 和田正洲 1984 「造形伝承論」日本民俗研究大系編集委員会『日本民俗研究大系 5 造形伝承』國學院大學
 渡辺誠 2002 「物質文化史としての視座から」、香月洋一郎ほか編『講座 日本の民俗学 9 民具と民俗』雄山閣

謝辞

これまで、筆者は「学史」を書く意味を見いだせずにいましたが、本研究グループにお誘い頂き、皆さんの研究や議論を拝聴しているうちに、民具研究のこれまでを振り返る必要性を感じるようになりました。書き始めてみると、さまざまな発見があり、大変勉強になりました。2012年12月9日におこなわれた公開研究会「ミンゾク研究の光と影—近代日本の異文化体験と学知—」において菊地暁先生がおっしゃっていた、「棚卸しとしての学史」の意義を大いに感じているところです。

本研究グループ代表者である角南聡一郎先生には、コンメンテーターとしてお誘い頂き、このような場を頂いたことに感謝申し上げます。また、小熊誠先生を初めとする研究会のメンバーの方々にもさまざまな刺激をいただきました。ありがとうございました。

執筆にあたって、資料の収集などには因琢哉氏、岡田翔平氏のご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

付記

本稿の校正中に祖父江孝男先生の訃報に接した。筆者の放送大学での卒業論文の指導教官が祖父江先生であった。稲作儀礼をテーマにしたいとお願いした私に旧島津藩領内の「田の神石像」に絞るようご指導いただいた。思い返せば、それが筆者の物質文化研究の始まりだったのかもしれない（私自身はあくまでも信仰研究のつもりだったのだが）。学恩に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。